

藻類・貝類養殖の普及促進

水産技術開発センター 企画・栽培養殖部

【背景・目的】

本県の漁業は、資源の減少傾向、魚価の低迷、燃油資材の高騰など、依然として厳しい経営環境にあり、漁業担い手の減少が続いている。

このため、沿岸漁場の高度利用や収益性の高い漁業の導入等について調査研究を進めるとともに、導入が可能な技術の実証試験を行うなど、生産現場への普及定着を進め、魅力ある漁業の創出と漁業担い手の確保育成を図る。

【普及内容・特徴】

- 1 ヒジキ養殖技術の普及・改良
 - (1) 県下関係者を参集した養殖技術研修会を開催した。
 - (2) 種苗挟み込み作業省力化を図るため、クレモナ撚糸へのヒジキ幼胚直付（ヒジキ種糸作成）試験を実施した。
 - (3) 鹿児島湾地域（西桜島地区）における試験養殖を指導した。
- 2 ワカメ種苗供給体制の再構築
 - (1) 県内種苗供給業者の種苗生産・培養技術（止水式）を点検指導した。
 - (2) センターにおいて、流水式の種苗生産・培養試験を実施した。
- 3 ヒトエグサ養殖技術の普及

新たな養殖地として、鹿屋市漁協の希望者等を対象にヒトエグサ養殖に係る研修会を開催した。また、始良地区のヒトエグサ養殖における、鳥類による食害対策について調査指導した。
- 4 貝類（アサリ）採苗・養殖技術の調査

始良地区におけるアサリの天然採苗・養殖に係る試験養殖等について調査指導した。

【成果・活用】

- 1 ヒジキ養殖技術の普及・改良
 - (1) 平成25年9月からのヒジキ養殖免許開始に際し、これまでヒジキ試験養殖等を実施してきた漁協等を対象として、試験養殖結果の総括と今後の技術的課題等について研修会を実施した。養殖実用化に向けた技術的課題として、サメハダコケムシ等、商品価値を低下させる付着生物対策があげられ、水技センターによる淡水浸漬等の対策技術事例が紹介されたが、技術確立のためには更なる検討が必要である。
 - (2) 種苗挟み込み作業省力化のためのクレモナ撚糸のヒジキ種糸生産試験では、①人工的に採取した幼胚を刷毛等で種糸へ直付けする方法、②種糸枠を水槽底面に敷き詰め、その上に母藻を設置し、自然に種糸に展着させる方法、の2方法により撚糸への幼胚の着生を図ったが、初期の幼胚付着は認められたものの、その後の脱落等が相次ぎ、種糸の生産には至らなかった。
- 2 ワカメ種苗供給体制の再構築

県内種苗供給業者に対して、技術の点検結果に基づき種苗生産・培養マニュアルをさらに改良・指導し、翌年度に備えた。
- 3 ヒトエグサ養殖技術の普及

始良地区のヒトエグサ食害については、囲い網による食害軽減が確認されたことから、鳥類（かも）による食害可能性が示唆され、本格的な食害対策体制が必要と思われた。
- 4 貝類（アサリ）採苗・養殖技術の調査

網袋に牡蠣殻焼成品と砂利を入れた採苗基質によるアサリの天然採苗と、これにより確

保したアサリ種苗による養殖技術を研修するため、三重県への視察等に同行し、技術的知見の充実を図った。なお、始良地区においては既に同様の試験養殖を実施しており、新たなアサリ養殖の可能性が示唆されている。

ヒジキ養殖技術研修会の開催（水技）



ヒジキ幼胚液の撚糸への直付け（試験①）



クレモナ撚糸枠を水槽に設置し、母藻からの自然放出により幼胚直付け（試験②）



①，②共、幼胚の着生が確認できた撚糸枠を水槽培養したが、脱落が相次いだ。



鹿屋市漁協でのヒトエグサ養殖研修会



砂利等を入れた網袋で採取されたアサリ種苗（三重県視察先）

